


\*湘南遺産プロジェクトHP\*



湘南の由来  
ショートショート  
第2話



“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第2話

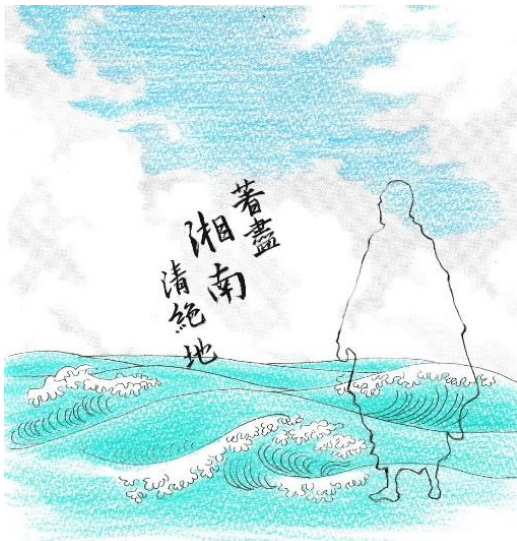
えと文 和田精二 2020,04,20

そう せつ

## 2-1 崇雪と西行

西行を追慕する“崇雪”と“大淀三千風(みちかぜ)”。  
西行が存在しなければ“ふたり”は大磯に住むこともなかったし、  
大磯が“湘南発祥の地”と言われることもなかった。  
崇雪はなぜ大磯に移住したのか。西行との絡みで考える。

36



大磯が“湘南発祥の地”と言われる理由は、

“湘南”という2文字を刻んだ標石が大磯の鳴立沢に  
現存している、という単純にして明快な事実による。

現代風に追補すると、

湘南呼称に関わる知的財産を崇雪がつくり、  
三千風がその物的証拠を現在につないだ・・・ことになる。

37



時代が鎌倉から室町に移ると、中国も宋、元、明へと王朝が変わっていく。

元が滅び、明が興ったとき、元王朝大医院の高級官僚“陳外郎(ちんういろう)延祐”なる人物が博多に亡命する。この“外郎(ういろう)家”の登場で“湘南の由来”のストーリーがいよいよおもしろくなる。



歌舞伎になったういろう売り

3代将軍“足利義満”は亡命した医師“延祐”の京招致を何度も要請するが果たせず、外郎家2代目“宗奇”が受諾し京へ移住する。

“宗奇”は 朝廷のご典医、外国使節の接待役、幕府の顧問などを務め、公家と同格で重用されたが、文化面でも活躍する。

家伝の薬“靈宝丹”を大衆薬“ういろう”として頒布したり、国賓接待用につくった菓子が好評なため一般にも披露する。こうして丸薬“ういろう”と元祖の“菓子ういろう”が誕生する。



京都・祇園祭の山鉾“蠅螂山”

カマキリが目を引く京都・祇園祭の山鉾(やまほこ)“蠅螂山(とうろうやま)”は2代目“宗奇”の建立・寄贈によって始まる。

喉の持病で廃業寸前だった2代目市川團十郎が外郎家3代目の“相治”が勧めた“ういろう”で快癒したため、お礼につくった歌舞伎の演目が“ういろう売り”。

こうして 外郎家は日本の文化史に足跡を残していく。

40



伊勢宗瑞(北条早雲)

1504年、外郎家5代“定治”は戦国大名の嚆矢“北条早雲”に招致され、京から小田原に活動拠点を定める。

“早雲”は 小田原と京のつながりを外郎家に求める。  
京の文化の吸収や、都人との人脈確保に“定治”が必要だった。

医薬業に加え、朝廷、幕府、公家との外交役などを任された  
“定治”は城の近くに豪華な店舗を構え、幅広く活躍する。

41



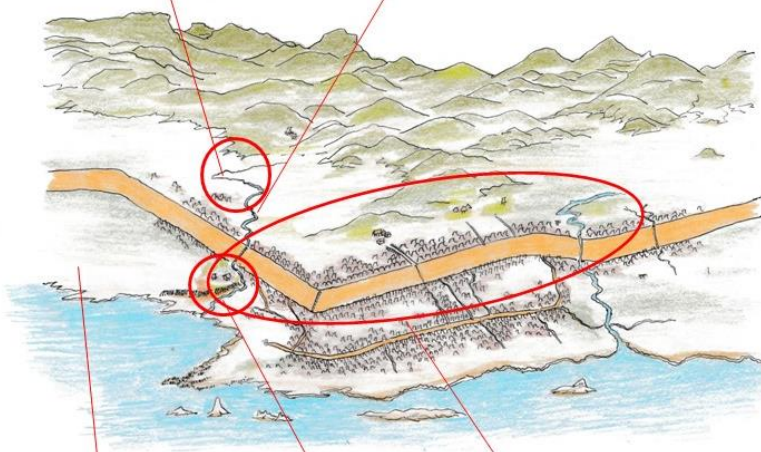
現在の鳴立庵入口

8代目“光治”のとき、次男“崇雪”が出家し小田原から大磯に移住、“西行寺”建立を目指し、五智如来像(石仏)を大磯に移送する。

手始めに、庵を結ぶ場所を決めるため、西行の“鳴立沢の歌”に注目する。

しかし、当時の鳴立沢は現在の鳴立庵の門前を流れる溪流の2丁ほど上流で、刑場や卒塔婆が林立する墓地があり、“死木立沢”と呼ばれた地域。

死木立沢と呼ばれた地域 鳴立川



こゆるぎの浜 鳴立沢 大磯宿

崇雪は、鳴立川が海に注ぐ地点の地形を重視。  
大胆にも、“鳴立沢”という地域呼称を上流から海を見渡せる崖の上に移してしまう。

こうして、新たな“鳴立沢”は、万葉の時代からの歌枕の地“こゆるぎの浜”の東の端と“大磯宿”の西の端の接する地に設定され、そこに鳴立庵が結ばれることになる。



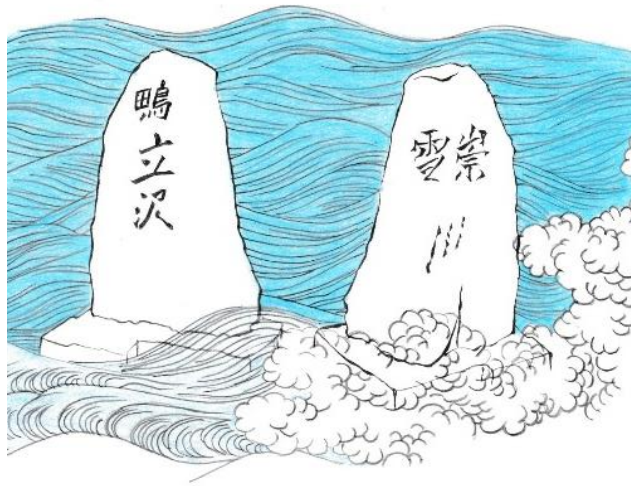
崇雪、鳴立沢に標石建立

しかし、崇雪の当初の目標“西行寺”建立事業は頓挫し、運び込んだ五智如来の石仏は活かされなかった。

事業の挫折に傷ついた崇雪は一念発起、鳴立沢に自分の形跡を残すべく標石の建立を思い立つ。  
表面に“鳴立沢”を刻み、裏面上部に 意表を突く大きさを自分の名“崇雪”を刻む。

結果的に、崇雪の名は歴史に永く残ることになる。

44



“鳴立沢”標石の表面(左)と裏面(右)

彼の最大の功績は、“崇雪”の文字の下に小さく刻んだ詩文を遺したこととされる。

そこには、一句五言からなる中国の漢詩の一部である“著盡 湘南 清絶地 (つけつくす しょうなん せいぜつのち)”が刻まれている。

眼前の景観は外郎家祖先の地、中国の“湘南”を想起させ、清らかで感動的、と解釈するにはやや無理がありそうである。

45



大日如来を中心に、密教の五智を具えた五智如来像が現在も安置されている

崇雪は西行寺の建立こそ果たせなかったが、ふたつの大きな仕事をした。

ひとつに、鳴立沢を、海を臨む風光明媚な場所に移したこと。  
ふたつに、鳴立沢に“湘南”を刻んだ標石を建立したこと。

崇雪は“大磯が湘南発祥の地”であることを示す物証を、人の目に触れやすい場所に遺してくれたのである。

46



明治時代の絵葉書に見られる外郎の店舗。この建物は関東大震災で倒壊（現在の店舗が右）。小田原市内の旧東海道を走る小田原電気鉄道が写っている（左側）。

以上の史実に対しいくつかの“なぜ”が生じる。

- なぜ、小田原から大磯に移り住んだ？
- なぜ、西行寺や鳴立沢の歌など、西行にこだわった？
- なぜ、鳴立沢を上流から海浜に移した？
- なぜ、自分の名を常識を超えた大きさに誇示した？
- なぜ、中国の湘南を想起させる漢詩を遺した？

以上の“なぜ”を解き明かすため、大胆に想像してみる。

47



五智如来(釈迦)

崇雪の時代は、禅僧が水墨画を描き、狩野正信のような武士が屏風に花鳥画を描き、寺僧が花を生けた時代。

崇雪にとって人生の理想モデルは、時代を超えて人望があり、存在感を示す西行。

家督を継ぐことは出来ないが、資金に恵まれた商家の次男が、出家し、草庵を結び、僧侶として、俳人として、時代の先端を生きるイメージを西行に重複させたとしても不思議ではない。

48



崇雪にとって最大の幸運は、“大磯”という、西行に因んだ環境が身近に存在したこと。

崇雪は、いよいよことを起こすが、唯一の失敗は、“西行寺”の建立・開山と言う分不相応な目標を掲げたことかも知れない。しかし、崇雪のプランナーとしての能力は、大磯を湘南発祥の地とすることに寄与したことは紛れもない事実。

以上から、多くの“なぜ”は“西行”との関係で読み解ける…

49



【参考5】



鳴立沢の標石は海岸の過酷な環境を避けるため、大磯郷土資料館に保管展示されている。  
(鳴立庵の庭にはレプリカを展示)

標石(丸印の中)は大磯郷土資料館中庭に展示



みちかぜ  
2-2 三千風と西行

地方俳人として、紀行作家として生きた“大淀三千風”  
そのもうひとつの顔は多芸多才な事業家としての顔である。  
井原西鶴との闘いに敗れ去った屈辱感を反発のエネルギーに変換し  
鳴立沢を浮世絵や江戸名所図会に取り上げられる名勝地に模様替えしてしまう。

51



史料に描かれた三千風

伊勢の豪商三井家に生まれた“大淀三千風”は、中央俳壇への  
夢を断ちがたく、31歳のとき、呑空法師と号して出家。  
松島瑞巖寺に身を寄せ、雄島の庵室に15年、俳諧の道を目指す。

剃髪し僧衣をまとう三千風の姿は西行を彷彿とさせた。  
後年“今西行”ともてはやされ、本人もご満悦だったという。

52



西鶴は俳諧から天分を開花していく

当時流行ったのが、一昼夜の独吟数を競うコンペ、“矢数(やかず)俳諧”。井原西鶴が中央俳壇にあってブームを牽引する。

三千風は、“仙台大矢数”興行でこれまでの記録1,600句に挑戦、堂々、3,000句の独吟を達成。西鶴に激賞され、一挙に中央歌壇に名を売り、独吟歌仙と呼ばれ、有頂天になる。

しかし、夢の様な日々は長く続かず、翌年西鶴が4,000句を達成、三千風は屈辱的な敗北感を味わう。

53



芭蕉は三千風を訪ねるが、彼は旅立った後だった

三千風は、敗北感の克服に2つの目標をたて、7年間の旅に出る。

2つの目標とは、

西鶴の記録を更新し、日本一の座を奪還すること。  
紀行文と俳句・俳文を集めた本格的な文集を刊行すること。  
そして、目標通り“日本行脚文集”7巻刊行を達成する。

“日本行脚文集”に刺激された“芭蕉”は陸奥を目指し三千風を訪ねる。

この旅で生まれたのが不朽の名作「奥の細道」である。

54



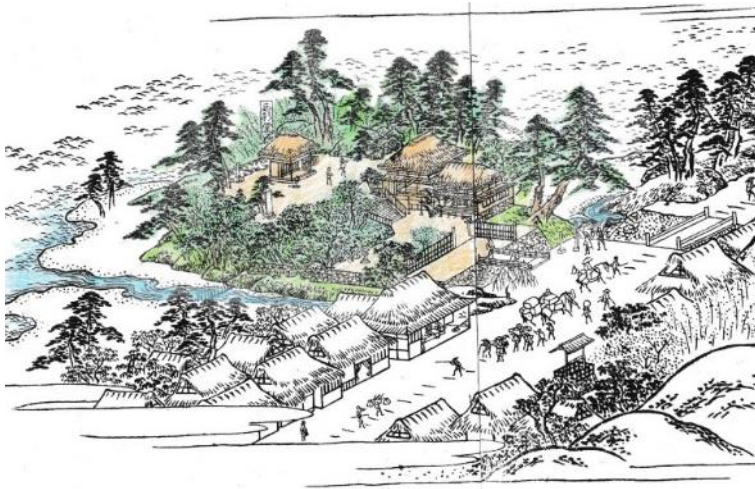
西鶴は矢数俳諧の後、好色一代男で  
浮世草子という小説形式を思いつく

もうひとつの目標は西鶴が打ち立てた4,000句超え。  
しかし、飛び込んできたのが“西鶴 23,500句達成”の報せ。  
矢数俳諧の流行さえ終焉させる破壊力に三千風は撃沈する。

中央俳壇進出の夢を完全に断たれた三千風であるが  
やがて、自分の3,000句達成時に、西鶴に利用されて  
踊らされていた事実も知ることになる。

絶望の海に沈降していく三千風。

55



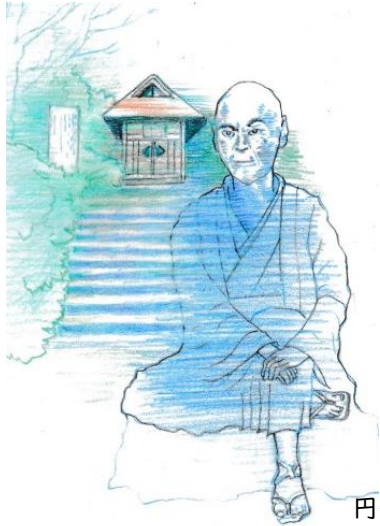
江戸名所図会に描かれた鳴立沢(著者が彩色した部分)

ところが、時間を経て、三千風はふたたび不死鳥の如く  
よみがえる。

西行人気にあやかり、鳴立沢を“西行ランド”に変貌  
させることを発想、実現に向かって再び動き出す。

大プロジェクト推進のエネルギー源は“西鶴トラウマ”  
の克服にあったことは間違いない。

56



手始めに江戸の俳諧団体から長い間要請されていた“俳諧道場 鳴立庵”の初代庵主就任をあっさり受諾する。

次に、崇雪入庵後30年近く経過し、廃屋同然だった庵をリフォーム、西行の“鳴立沢の歌”に因んで“秋暮亭”と名付ける。

続いて“円位堂(西行堂)”を建て、京で購入した文覚上人鈔(ナタ)づくりの“西行座像”を安置する。

円位堂に安置されている西行座像

57



さらに、西鶴作「日本永代蔵」に登場する大黒屋のモデルの江戸本町呉服屋富山氏に寄進してもらい“鳴立沢石碑”を建立する。

また、西行の500年忌を記念した“倭漢田島集”を刊行し、“鳴立沢縁起”“法語三人物語などを出版する。

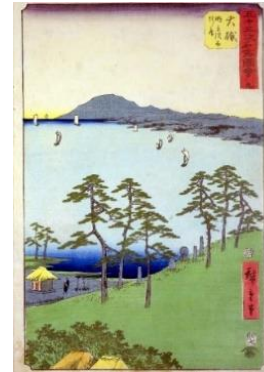
また、謡曲“鳴立沢”の創作など、“鳴立沢”に因んだ宣伝や広報を積極的に行う。

こうした努力が実って訪問客が増加、鳴立沢は新しい名勝地として人気を高めていく。

円位堂の手前に立つ富山氏寄贈の石碑

58

鳴立沢は浮世絵や江戸名所図会に描かれる程評判になるが、遂には西行の力にあやかっか、“歌枕”の地に上りつめてしまう。



59

### 鳴立庵案内図



三千風は文学面では二流と評されるが、企画から宣伝広報、資金調達までをこなす総合プロデューサーとしての能力は傑出していた。

三千風は“今西行”と言われることに無上の喜びを感じていた。

赤文字部が三千風が手掛けた箇所 (地図は1990年版使用)



60



崇雪と三千風、  
それぞれが大磯に移住し、  
鳴立沢を舞台に活動した結果、  
大磯を“湘南の由来”に結びつける  
成果をあげる。

西行が生きた時代と、  
崇雪、三千風が生きた時代は大きく異なるし、  
崇雪と三千風の間には接点もない。

存在したのは、崇雪と三千風、  
それぞれの西行に対する追慕の気持ちと  
西行追慕事業に取り込む執念。

西行あつての崇雪と三千風とすれば  
西行抜きで“湘南の由来”は  
成立しないことになる。

鳴立沢を“西行・崇雪・三千風”の三角形で見る！

【参考6】



西行伝承模式図 出典: 花部「西行はどのように作られたか」

西行ほど全国に伝説が伝承され、広く愛されて来た人物はいない。  
しかし、不幸なことに明治以降の西洋思考の導入により、伝説の多くが論理的に否定されたことで、西行伝説は消滅していった。

【引用文献・資料】

- 37: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その8
- 42: “東海道大磯宿分間延絵図” を模写加筆修正
- 48: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その12
- 50: [www.library.pref.mie.lg.jp](http://www.library.pref.mie.lg.jp) (三重県立図書館) の図を模写
- 54: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その11

- 56: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その13・図の修正
- 57: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その13
- 58: 大磯町文化財調査報告書第29集掲載図に一部加筆
- 59: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その13
- 60: 湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る” その14



◆ 第2話 完了